

P2-97 術前 SCC 異常高値を伴った巨大右卵巢皮様嚢腫および左同腫瘍茎捻転の一例

徳島県立三好病院

松下光彦, 中山聡一郎, 植田敏弘

今回我々は、術前 SCC 異常高値 (11.3ng/ml) を伴った巨大右卵巢皮様嚢腫および左同腫瘍茎捻転の一例を経験したので報告する。症例 M.S., 18 歳, G0P0. H16 年 1 月 14 日未明、突然の下腹痛にて救急外来に搬送、腹部単純撮影にて石灰化像を伴う巨大腫瘍を認め当科紹介・入院となった。術前腹部 CT では肝門部から骨盤腔にいたる腹部正中から右側にかけての約 28×17×15cm の多嚢胞性腫瘍を認め、骨化、脂肪、軟部陰影が混在していた。術前腫瘍マーカーでは、SCC が 11.3ng/ml と異常高値を示し、他 CA-125 が 127U/ml, CEA は 6.9ng/ml と軽度～中等度上昇していた。下腹部痛が NSAID でコントロールできたこと、悪性の可能性があること、若年者であり妊容性を考慮しなければならないこと、術式の決定等インフォームドコンセントを充分に行う必要があり待機手術とした。H16 年 1 月 21 日、全身麻酔下に開腹し右付属器摘出及び左卵巢嚢腫摘出術を施行した。術中所見は、両側性の卵巢皮様嚢腫、右側は 2090g と巨大で被膜破綻無く術前診断の如くであった。左側は orange size (197g) で茎捻転 (時計回転 180°) を認めたが卵巢実質の色調変化は軽微だった。腹水少量、骨盤内リンパ節触知せず、腸管および腹膜表面も著変を認めなかった。術後診断は mature cystic teratoma、組織学的に皮膚、毛髪、気管、肺、脳と髄膜、及び唾液腺等含むが未熟な成分はなく悪性所見を認めなかった。術後経過も良好で、術後再燃もなく性周期も回復、腫瘍マーカーも正常化している。若年発症で、しかも良性にも関わらず SCC 異常高値を伴う巨大卵巢皮様嚢腫の報告は稀である。今後組織学的検索等追加してマーカー上昇の機序についても検討したい。

P2-98 近年当科にて経験した巨大卵巢腫瘍を伴う茎捻転 5 症例についての検討

徳島県立三好病院

中山聡一郎, 植田敏弘, 松下光彦

卵巢腫瘍茎捻転は、婦人科急性腹症の代表的疾患であり、腫瘍がオレンジ大のものに好発するとされている。近年我々は、3 kg 超を含めて 5 例の巨大卵巢腫瘍 (平均約 1170g) を伴った茎捻転を経験し若干の知見を得たので報告する。症例 1; 21 歳, G0P0. H12 年 11 月 30 日夕、突然の下腹痛にて救急外来受診、約 18×10×10cm の下腹部腫瘍を認め同日 urgent operation となった。術中所見は、1460g の右卵巢腫瘍茎捻転 (時計回転 720°)、褐色腹水少量、術後診断は mature cystic teratoma であった。症例 2; 53 歳, G1P0. H14 年 6 月 4 日深夜に突然の下腹痛出現、翌朝救急外来受診。約 15cm の下腹部腫瘍、進行する貧血、Douglas 窩穿刺にて血性腹水あり、同日 urgent operation となった。1100g の右卵巢腫瘍茎捻転 (時計回転 720°) と中等量の腹腔内出血を認め、術後診断は fibrothecoma と稀な症例であった。症例 3; 71 歳, G4P4. H16 年 3 月より腹部膨満および反復する下腹部痛あり、肝下面から骨盤腔にいたる巨大卵巢嚢腫を認めた。6 月 1 日に開腹、3670g の左卵巢嚢腫茎捻転 (反時計回転 360°) あり、腹水は認めず。術後診断は mucinous cyst adenoma であった。他 2 症例を含め計 5 例共に悪性との鑑別に苦慮するところがあったが、突発性であること、比較的全身状態が良いこと、画像診断にて腫瘍サイズに比し腹水が乏しいこと、また間質の浮腫を反映した嚢腫壁の肥厚があること等が術前診断に役立った。また、経験や先入観により大きすぎること本疾患を除外することには注意が必要であると思われる。

P2-99 卵巢腫瘍茎捻転症例の臨床病理学的検討

近畿大

飛梅孝子, 塩田 充, 梅本雅彦, 島岡昌生, 小谷泰史, 星合 昊, 渡部 洋

【目的】卵巢腫瘍茎捻転は産婦人科救急でしばしば遭遇する疾患である。症状、画像所見より診断は比較的容易とされているが、捻転数や腫瘍径と術式との関連、白血球数や CRP 値の意義については未だ明確ではない。【方法】1995 年から 2004 年 8 月までに術前に卵巢腫瘍茎捻転と診断され当科にて手術の行われた 32 例について、その正診率、茎捻転数、左右差、腫瘍径、術前白血球数、CRP 値、組織型との関連について検討した。【成績】正診率は 32 例中 26 例、81.2% であった。捻転数では平均 1.68 回転、604 度で 2 回転 720 度が 33.3% で最も高頻度であった。また右側が 18 例、69.2% と左側より多かった。腫瘍径は 5cm 以上 10cm 未満が 42.3% を占めた。卵管、正常卵巢の機能回復が期待できず付属器摘出術を選択したのは 20 例、68.9% であった。捻転数と付属器摘出率には相関を認めなかった。しかしながら、付属器摘出率は径 10cm 以上で 84.6% と 10cm 未満、69.2% より高かった。CRP 値は径 10cm 未満ではすべて陰性であったのに対して、10cm 以上では 66.0% が陽性であった。白血球数は径 10cm 以上において 72.7% が異常高値を示し、その頻度は 10cm 未満、45.5% より高かった。また組織型では良性 25 例に対し悪性を 1 例認めた。良性では mature cystic teratoma が 10 例 38.5% と最も頻度が高かった。悪性は dysgerminoma であった。【結論】卵巢腫瘍茎捻転の正診率は 81.2% であった。捻転数は 2 回転が最も多く、右側が左側より多い。径 10cm 以上で高率に付属器摘出を必要とした。術前 CRP 値、白血球数ともに径 10cm 以上で高く、捻転数には無関係であった。